

## 座長のまとめ(4~6)

海野徳二(旭川医大)

この群の3題の演題は、鼻局所へのエアロゾル療法を実際の治療という立場から検討したものである。

大橋らは「各種薬物の気道粘膜におよぼす影響に関する実験的研究」で、線毛上皮の機能的、形態的变化について発表した。大阪市大耳鼻科に於ける従来からの研究の一環として、温度の影響、薬剤添加の影響をみたものである。ネブライザー等による鼻の局所療法の目的は、薬剤の持つ直接の効果を期待する、粘稠な鼻汁の溶解を促進する、粘液層を正常化し線毛機能が効果的に営まれることを期待する、などである。1つの効果を強調するあまり線毛機能を強く損うようなことがあっては、総合的には適切な薬剤とは言えない。温度としては30~40°Cの間が好ましいようである。線毛に対する影響が強いものとしては、キシロカイン、ボスミン、蒸留水、プロタルゴール液などがある。生理的食塩水、ステロイド液、低濃度リバノール液は影響が少ないとのことであった。この発表に対して、観察チャンバー内の湿度の問題、ボスミンのおよぼす細胞変化メカニズムについて質疑応答がなされた。種々の薬剤を用いてネブライザー療法を行うに当って、用いる溶液の線毛機能や細胞形態への影響が、すべて解明されているとは思われない。このような点に関しても十分検討されてから使用すべきであるという警鐘の意味を持った発表であった。

ヒスタミン加ヒト免疫グロブリン製剤によるネブライザー療法は、第5回研究会の指定演題であり、昨年も多くの出題があったが、今回も竹内らの「特異的減感作療法におけるHistaglobin Nebulizer併用療法」と、岩田らの「鼻過敏症患者に対するリノピン療法の臨床的検討」の2題が出題された。前者は、特異的減感作療法開始早期で、効果発現が緩徐なことから脱落例が出ることを防ぐ目的で、効果発現の早いヒスタグロビン・ネブライザー療法を併用し、脱落例の減少を図ったものである。併用により早期に症状改善が期待できるという結果を発表した。

岩田らの発表は、ネブライザー療法と注射療法との臨床効果を、従来の効果判定法に加えて鼻呼吸抵抗値の測定も行なって比較し、注射と同等の効果が認められることを報告した。鼻呼吸抵抗値の測定は演者らの主要研究テーマの1つで、連続的な抵抗値の描記によって誘発後の経過が客観的に表示できることは、判定法として有意義なものである。これら2演題に対して、琉球大高木先生より、ネブライザー噴霧中の薬剤濃度はどうなっているかとの質問がなされた。重要な問題であるが、これ迄あまり検討されなかったように思う。線毛機能におよぼす種々薬液濃度とも関連して、実際に作用する場での濃度は興味のあるところである。また、使用した量のすべてが有効に作用しているのではなく、容器中に付着し残留する量もある。第5回研究会の特別講演で名市大の後藤幸生先生は、実際に有効に噴霧される量は使用量の30%位ではないかと述べられたが、この点もあわせて今後検討を要することであろう。我々が現在行っている準備実験では、鼻腔内に留まり得る溶液量は極めて僅かで、鼻底に集まった溶液は短時間で咽頭に移動し嚥下されてしまう。ネブライザーによる鼻局所療法には、まだ解明せねばならない多くの点が残されている。